

かき 炭疽病について



図1 新梢の病斑



図2 果実の病斑



図3 果実病斑上の胞子塊



図4 分生孢子（顕微鏡下）

1 生態

カキの炭疽病は糸状菌（*Glomerella cingulata* (Stoneman) Spaulding et Schrenk）に感染することで生じる病害である。

本病は主に新梢、果実に生じるが、葉柄や葉身に発病することもある。新梢では暗褐色の円形ややへこんだ病斑を生じる。発芽して間もない新梢に発病すると芽が枯れるほか、枝の周囲を取り巻くほど拡大すると、先端の葉が萎凋し、枝が枯れる。果実に発病すると黒色の小斑点を生じ、やがて拡大して円形～楕円形の病斑となり、病斑の中央部は少しくぼむ。

本病は罹病枝芽、または被害落葉上で菌糸の形で越冬し、翌年の春に分生子を生じて伝染源となる。分生子は雨水によって飛散し、新梢や果実に到達して発病する。病斑上に生じた分生子は二次伝染源となるため被害が拡大する。

2 発生状況

本病の発生適温は20℃～27℃で、5月から10月まで発生する。降雨により胞子が形成され、風によって飛散するため、多雨の年は発生が多くなる。

新梢では5月頃から発病し、新梢が硬化するまで発生が続く。また、二次伸長枝や徒長枝が多い場合は新梢での発生が長引くため、その後の果実での発生も多くなる。

果実では幼果期から発病する。梅雨明け後に好天が続く時期には新たな発病は少なくなるが、その後降雨が続くと再び発病が多くなる。

本病の発病程度には品種間差があり、一般に甘ガキ品種は本病に弱く、渋ガキ品種は本病に強い。

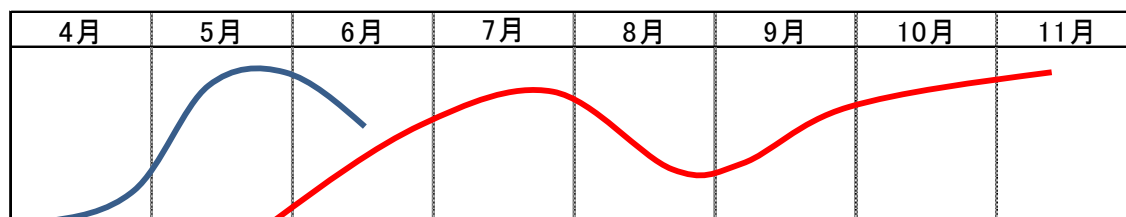


図5 炭疽病の発生消長（—：枝での発病、—：果実での発病）

※二次伸長枝や徒長枝が多い場合は枝での発生が長引く

3 防除対策

(1) 薬剤による防除

新梢での発病が多いと、その後の果実での発病も多くなるため、初期の防除を徹底し、新梢での発病を防ぐ。梅雨や秋雨の時期に降雨が多いと果実での発病が多くなるため、薬剤の散布間隔を短くするなど、防除を徹底する。

(2) 耕種的防除

罹病枝芽は翌年の伝染源となるため、冬期の剪定時に除去を徹底する。発病した新梢や果実は2次伝染源となるため、早期に除去し、処分する。二次伸長枝や徒長枝は罹病しやすいので、夏期の剪定時に不要な徒長枝を除去し、処分する。

降雨によって形成された胞子は風によって飛散するため、防風林や防風垣を設置すると発病を抑制できる。

(3) 栽培管理

密植園は通風や採光が悪く、発生を助長するため、間伐等により環境を改善する。また、窒素肥料の過用や強剪定を避け、徒長枝や二次伸長枝を発生しにくくする。なお、排水不良園は発生が多くなるため、排水性の向上を図る。